

# 男はある夜突然に

～転がり落ちるその前で～



武田 健

## はじまり

---

今になってふりかえると、あの夏の出来事は、全ては必然だったかもしれないと思う。誰かが「人間は一人じゃ生きられない」とか言っていたけれど、それも何となく分かる気がする・・・。

日本各地で最高気温を記録したある夏の夕暮れ、営業から帰った落合は会社の前の喫煙所で缶コーヒーを片手にタバコをふかしていた。夕方だというのに、まだ体全体にまとわりつくような湿った暑さが残る。ちょっとしたストレスから、1年半やめていたタバコをまた吸い始めた。家族や友達から、猛反発にあったが、値上がりまでの期間限定での復活だと本人は説明する。

オフィスに入るとIT系ベンチャー企業ということもあり、プログラマーがパソコンに向かってもくもくとキーボードを叩いている。その窓ガラス越しにはテニスコートがありマダムらしき中年女性が真っ黒にやけたテニスコーチらしき人とナイターで個人レッスンを受けている。「あっちはラケットでこっちはキーボードかよ」と小言を言ったあと、デスクのパソコンを立上げ、明日の提案に向け、残り数ページ分の仕上げにかかった。

数分後、上司の石上に呼び出されデスクの前に行くと八時から会議室を取ったので話がしたいとのこと。もともと口数の少ない石上だがとくに落合に対しては年上ということもあり基本は上司と部下の関係でありながらもノータッチである。その石上からのふいな呼び出しに、何となく嫌な予感がよぎった。

八時ちょうどに会議室に行くと、役員と石上が先に二人で座っている。席に着くと最初に話しを切り出したのは役員の竹之内のほうだった。

「落合くんも知っていると思うが、折からの不況でわが社の累損はもうすでに一億を超え、経費などを抑え、役員手当などもカットし、もうほとんど打つ手がない状況である・・・」

そのうえで残された手段は人員整理しかないらしく、次の勤め先を何とか探してほしいと珍しく頭を下げてきた。いつまでですか？と吐き捨てるように尋ねると8月末までの給料は払うので、8月は有給を使って仕事を探してもらって構わないとのことだった。なんかいろいろと会社の方針とかこの際だから突っ込んでやろうかと思ったが、役員も実は同じ境遇で8月までで退職することを聞き、やめるヤツにグチを言ってもしょうがないと割り切り、無言のまま会議室を出た。

帰り道、しばらく止めていたお酒を買いに自宅最寄りのスーパーに立ち寄る。

気のせいか夜の九時過ぎにも関わらず普段よりざわついた感じがただよっていた。特にお酒と惣菜コーナーの前に人が群がっている。そんな光景を横目で見ていると「日本代表を応援しよう！今日はワールドカップ初戦です！」といった張り紙が目に入って来た。このざわつきが、そのせいだったことに気づく。

家に着くと、灯りは消えていた。湿度多めのリビングに入り、照明のスイッチと同時にエアコンのスイッチを入れる。ネクタイをゆるめていると机のうえに、嫁の字で書いたメモがおいてあった。

「少し頭が痛いので先に休みます。おかずは電子レンジに入っているので温めて食べて下さい。 朋子」  
ある意味このタイミングで顔を合わせなくて良かったかもしれないと落合は思った。何か些細ことでもからんでしまう気がしていたからだ。ただいづれにせよ今日のことは、遅かれ早かれ伝えなければならないかと思うと、胃の奥のほうにキュッと締めつけられるような痛みがはしった。

シャワーを浴び、冷蔵庫からビールを取りだし電子レンジでおかずを温めつつ、テレビのスイッチを入れた。ちょうどサッカーの中継がこれから始まるタイミングのようで、少し興奮気味のアナウンサーが反対にクールな日系ブラジル人のレポーターへ日本が勝つためのカギなどをしきりに聞いている。

日本代表はワールドカップの出場を決めてからというもの、その後の結果はおもわしくなく、監督交代論も浮上し、全体的にあんまり盛り上がっていなかったのは事実である。

がいざワールドカップが始まり、異国の地で国歌がスタジアムに流れるのを聞くと、今までのことはすっかり忘れ、何となく応援したい気持ちに不思議となった。そんな気持ちは、誰もが一緒のようで家の前に最近出来たスポーツバーでも、普段はガラガラなお店が、店の前まで人があふれユニフォームに着替えた若者がしきりにさわいでいる。試合結果は、監督の采配が見事にはまり、フォワードに大抜擢された選手が、前半右サイドから受け取ったパスを冷静に決め、そのまま逃げ切り勝利をおさめた。試合終了のホイッスルがスタジアムに響くと、ベンチにいたベテラン選手

たちがピッチに駆け寄り肩をたたきあったり抱き合ったりしていた。

そんな光景をぼんやり見ていた落合は、感動と同時に今日の出来事とがオーバーラップし、涙が流れていた。涙をぬぐったあとは、何とかしよう。きっと何とかなる。不思議とそんな前向きな気持ちになった。

翌日から、朝と晩にかけ、ネット系の求人サイトへ登録を済ませ、自分の経歴にマッチした十数社ピックアップし片っ端から応募を開始した。

結果は散々だった。数十分で返信が来る会社もあれば数週間程度で返信が来る会社もあったが結果はいずれも「不採用」だった。面接まで行ければ、何とかなると思っていたが書類選考すら通らなかった。少々へこみながら、待遇面なども落として応募を試みたが結果は同じで、不況による転職の厳しさをあらためて突きつけられた。

全く先に進まない苛立ち、誰にも話すことが出来ないはげしさ、子供たちの将来を考えるとどうして良いか分からなくなった。四一歳まだ二十年は働ける、でも働く場所が無いことが辛かった。

そんな中、サッカー日本代表は快進撃を続け決勝リーグ出場決める。

時同じくテレビでは、財団法人などにおいて、多額の隠し財産があることを、新しく政権を取った与党が、事業仕訳の中で見つけたことを放送していた。調査によると全国に二百あまりある財団法人の役員の平均年収が一千六百万円以上で最高は二千三百万と報じていた。一人の役員の給料で4～5人の雇用が新たに確保出来るかと思うと無償に腹が立った。それを見て落合はある計画を思い立つ。

## プロジェクト始動

---

久しぶりに渡辺へと電話した。約一年半ぶりの電話だったが、落合からの電話をひどく喜び「今度、食事でも？」という誘いを快諾してくれた。

待ち合わせ当日、昭和の面影が残る居酒屋に渡辺は足を引きずりながらあらわれた。力士をやめてから随分と経つが気のせいかな今でも鬢付け油の甘い香りがするのが不思議だ。

電話では少し痩せたと自慢していたが、いつもと変わらぬ巨体で、店に入ると中にいた客のほとんどが。元力士である渡辺を見つめていた。

軽いつまみとビールを注文し乾杯をしたあと互いの近況などを話した。渡辺は怪我で力士を廃業したあとはなかなか定職にはつかず最近では、時給九百円の日雇い派遣で、倉庫内で飲料などのピッキングをしているとのことだった。ただ社員ではないので、いつも仕事が確保出来ないのがもっぱらの悩みと話した。

一方落合は、ITベンチャーに転職したものの数日前にリストラを告げられたことなどを洗いざらい話した。

数杯のジョッキを空けチューハイに変えたあたりで、今日のメインとなるある計画についての話を切り出した。渡辺は、話を聞き終え少し沈黙したあと静かに言った。

「勝算あるか？」

「やるからには絶対に成功させるさ」

「そうか分かった。おまえがそういうなら力を貸すよ。仲間が必要だな。それも強力なやつ」

「ルートあるか？」

「そうだな。何人か心当たりははいるかな」

「じゃあかぶってもしょうがないので手分けしよう。落合は財団法人とかに詳しい奴と警備会社とかに詳しい奴を見つけてこいよ。俺は、官僚とかにルートあるやつと鍵開けのプロとか他に使える奴をみつけるから」

そんな話が交わされたあと、終電間際というので、再び一週間後に会う約束をしてその日は別れた。

一週間後、都内のカラオケボックスにてメンバー全員が集まり簡単な自己紹介した。はたから見るとあやしい男ばかりで異様な感じをはなっている。

## 計画の全貌

---

今日は忙しいなか、集まってくれてありがとう。

これから「ある計画」についての話をするがその話を聞いたうえで各自参加するかどうかを決めてもらいたいと思う。

港区に〇〇財団という法人があり、その内部にある金庫には五億円規模の隠し財産があるとの情報を入手した。このお金自体は公にすることが出来ない訳ありなお金で、仮にお金を奪ったところで警察には届けることが出来ない代物である。そのため例え捕まったとしても不法侵入程度の罪にしかならないという低リスク高リターンな計画だ。この計画における一人当たりの報酬は約三千万、計画の実施は次回の事業仕訳において隠し財産がマスコミへ明るみにされる前の今から一ヶ月後、九月中頃を予定している。ここまでが計画の概略だ。何か質問がある人はいるかな？

ある意味分かりやすい計画であったのか誰からの質問もなかった。落合は先へ進める。

今日集まったメンバーにはこの計画の手助けをして欲しい。無論この計画を聞いて、降りるものがいたらこの場で降りてもらって構わない。ただしこの計画のことだけは誰にも話さないという約束が前提だ。

この話を聞き、部屋から出ていく者は誰一人もいなかった。その場で全員が賛同しメンバーとなった。数にして十人である。

間髪入れずに先へ進める。

次にこの計画での役割と進め方だが、当日内部に潜入する人間は自分を含めもう一名。この一名は潜入から出るまでのわずか十分で内部のカギを全て開けることが出来るその道のスペシャリストでかつ足の速い奴がいい。あとは外で現金輸送用のスクーターで待機するものが二人。そのスクーターから現金を受け取り車で輸送するものが一人。

当日、財団法人内には、警備員は恐らく常駐していないものの、外部の警備会社の夜間監視システムが導入されている。そのため、その電気通路を一時的に遮断するものが一名。警備会社へ先回りして車が動かないように細工をするものが2人。事前に財団法人で働き内部調査をするものが一人。自分たちの輸送用の車で待機するものが一人。そして最後に離れた場所から、全体を統括するのが渡辺お前の役目だ。集めたお金は、自分のほうで責任を持って一括で預かり1週間後、順番に分けていくようにする。そのため全員で集まるのは今日が最初で最後になる。なお今後のメンバー同士のやり取りについては、全て携帯での連絡のみとして、メールやメモなど証拠になりそうなものは一切残さないように注意してほしい。

計画の全貌を話した落合は、のどが渴いたこともあり目の前にあるジョッキを一気に飲み干した。すると他のメンバーも全員ジョッキを空けた。その後はまわりに怪しまれぬよう、何曲かの歌をカモフラージュ的に歌いつつ、簡単な前夜祭をして別れた。

## 内部潜入

---

3日後、柏原は、元議員秘書の石川のコネもあり財団法人内の食堂で皿洗いの仕事を足早に決めた。勤務は一週間後ということで朝8時から昼の2時までで時給は千円と決まった。

一方、落合は計画を優先させるため、転職活動は一時中断し、施設周辺の交通事情を確認したり、逃走経路などを決めたり、バイクの手配など細かい作業を進めた。

数日後、柏原からの連絡があり、外苑前近くのコーヒーショップで待ち合わせをし施設内部の確認をした。柏原は、入ってすぐ運がいいことに、金庫のある理事長室へ、食事を配膳しているとのことでルートを完璧に教えてくれた。

入口から開ける扉は全部で3つ、理事長室だけは鍵は2重で、そこに入れば金庫は置かれている。警備会社への通報が入り、警備員が到着するまで、およそ十五分、この間に4つの鍵そして金庫を開けて逃走するという、実はかなりの離れ技が必要な難しい作戦だった。最悪のことを考え、警備会社の車を遅れさせたとしても、五～十分しか稼げない。でも全てが進んでいることを考えるともう後戻りは出来ないと思腹をくくった。